ついて」『研究連絡誌』第1号　(財)千葉県文化財センター　1982

山岸良二「『方形周溝状遺構』研究序説(Ⅰ)——千葉県の現状分析——」『東邦大学付属東邦中学校研究紀要』第2号　1983

4）金丸誠・他『佐倉市立山遺跡』（財）千葉県文化財センター　1983

5）この点に関しては最近栗田則久氏が詳述している。栗田「千葉東南部地区における方墳の様相」『研究連絡誌』第5号　（財）千葉県文化財センター　1983

6）谷島一馬「御林跡遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』1979　で御林跡，台C地点の2例が紹介され，さらに市原市文化財センター　浅利幸一氏の御教示により，天神台（諏訪台）遺跡でも検出されていることを知った。伴出須恵器により8世紀後半の年代を与え得るとのことである。

7）市原市文化財センター　山口直樹氏，森本和男氏，近藤敏氏らの御厚意により実見させていただいた。

8）筆者は原秀三郎氏，鬼頭清明氏らの古代国家論に従っている。

原秀三郎『日本古代国家史研究』東京大学出版会　1980

鬼頭清明『律令国家と農民』塙書房　1979　他多数

9）舟尾好正「奈良朝の国家と農民」『日本史を学ぶ1　原始・古代』有斐閣　1975　他

内耳土器について

田形孝一

Ⅰ

近年，県内においても中近世遺跡の発掘例は，城郭を中心にではあるが年々増加の傾向にある。又中近世以前の遺跡の発掘調査においても，わずかながら該期の遺構・遺物の出土例も認められるところである。本稿では，それらのなかで中世以降の日常什器である内耳土器を取り上げ，昭和57年度当センターで発掘調査を実施した高沢古墳群（千葉市生実町2703－1他所在）の出土例を紹介するとともに若干の私見を加えたいと思う。

Ⅱ

内耳土器は，土器内面に釣手様の内耳を付した特徴的な形態を有する土器で，中世以降の日常什器として広く使用され続けていたと思われる土器であり，器型的には，体部と区別されて外反する口縁部を有し器高の高い土鍋と，口縁部の外反がなく器高の低い焙烙との二器種が考えられている(註1)。このうち内耳鍋には鉄製のものがあり，形態的にみると鉄製内耳鍋から内耳土鍋への影響が考えられるところである(註2)。

又，内耳土器の関東地方全般の出土傾向は，該地方の各県から普遍的に出土するが，特に北関東に圧倒的に多く，一遺構内で多量の土師質土器・陶磁器などの遺物と共伴し，中・近世の日用雑器

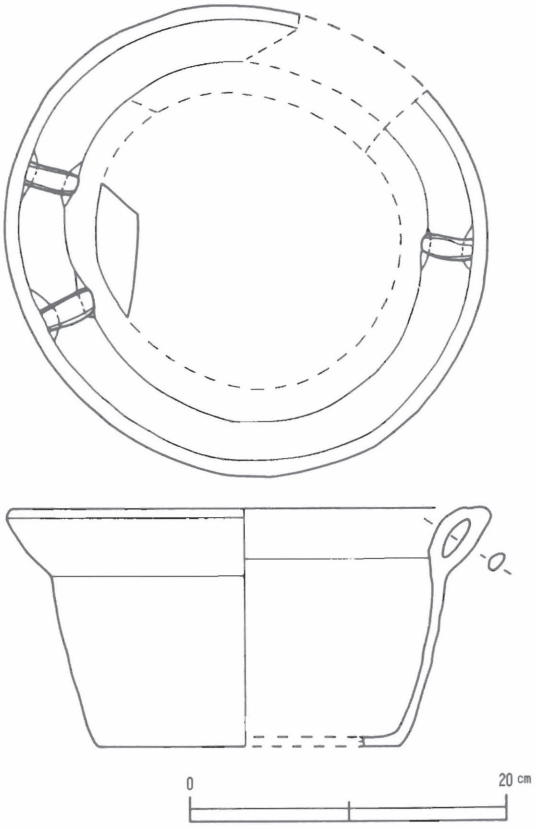


図1　高沢古墳群出土内耳土器実測図

の良好なセット関係を摑むことも可能である。又それらの共伴遺物と共に試論的な編年を組み立てた報文等も散見することができる(註３)。一方県内での内耳土器の出土例は北総を中心に散見することができるものの(註４)，全体の出土量としては北関東とは比較にならない程の量でしかない。しかし現段階で，出土量の量的な地域差を以って北関東との相違を認めることは難しく，今後の本県における中近世遺跡の発掘調査例の増加を俟って検討を加えていかなければならないだろう。

本稿で取り上げる高沢古墳群出土の内耳土器は註１・註３であげた試論的な各編年のなかで，一様に15～16世紀の年代決定を与えてあり，かなり長い年代幅を持つものの，大方の年代決定としては大過ないものと考えられる。そこで以下では，上記出土の内耳土器の詳細と他遺跡出土の類似例を上げ，若干の検討を試みることにしたい。

III

千葉東南部ニュータウン内で昭和57年度に発掘調査を実施した高沢古墳群は，国鉄内房線沿いの国鉄鎌取駅西約１㎞に位置し，古墳４基の他，中～近世の塚３基，土塁，空堀等を検出し，本遺跡の南約0.7㎞に位置する有吉城跡との有機的な関連が考えられる。今回報告する内耳土器は，その高沢古墳群の005号址からの出土である。

図１にあげたように，口径30.5㎝，底径18.6㎝(推定)，器高15.0㎝を測る土師質の内耳土器で，器型的には鍋型を呈している。色調は内面で茶褐色，外面で暗茶褐色を呈し，外面及び底部に煤等の付着及び二次焼成を受けた痕跡等は全く認められない。口縁部から体部にかけてはほぼ完形であるが，底部は全体の約1/10程度しか遺存しない。

内耳は１対２の３耳を有し，１耳と２耳の内耳は土器のほぼ対称の位置に配されている。内耳の幅は３耳ともほぼ均一で1.2㎝～1.3㎝を測り，口唇部内面の縁から連続して貼り付けられ口縁部全体にかけて橋状に付着している。段面は表面ではやや丸味を帯びるが，裏面では表面と比較すると平らで釣紐等の使用による擦痕は認められない。

底部は平底で，底部から体部にかけては若干の膨らみを持ちながら比較的急角度に立ち上がり，口縁部下端から大きく外反して口唇部に至る。体部外面から口縁部にかけて，製作時の指頭痕が随所で見られ，全体的に凸凹の目立つ粗雑な造りである。指頭痕は，土器外面の口縁部と体部の境の，内側に内耳を付した位置で特に明瞭に認められ，内耳を付着する場合，外面に指を充て，それを支えにして内耳を貼り付けた痕跡がよく観察できる。

又，底部と体部の最下部では，箆状工具による削り痕がわずかに認められるが，粗雑な調整のため明瞭ではない。内面は全体に刷毛状工具による比較的丁寧な調整が施され，口唇部については外面にも同様な調整が認められる。

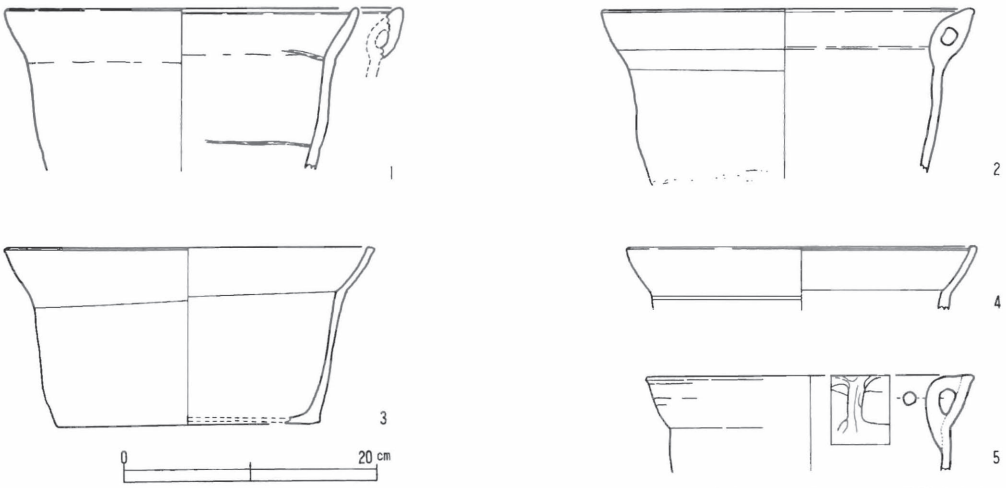
器厚は口縁部が体部より若干厚く，体部及び底部は比較的薄手である。

胎土には砂粒・雲母を含むが，雲母は非常に細かく，量的にはあまり目立たない程度のわずかな量である。

内耳土器を出土した005号址は土坑であり他の出土遺物として鉄刀，鉄釘と思われる鉄製品，古銭２枚(政和通宝・永楽通宝)，擂鉢等を出土している。これらの出土遺物を見ると本土坑は中世の土坑墓としての性格を持つようにも思われる。中近世以降の土坑墓からは，内耳土器を被葬者の頭部にかぶせた状態で検出する例があり(註５)，民俗例にあるいわゆる「鍋かむり」に共通する具体例とされている(註６)。内耳土器の使用としては副次的なものであろうが，高沢古墳群005号址出土の内耳土器も，出土した土坑の性格が土坑墓的要素を持つため，前述したような状態で埋納されていたことも考えられる。このことは，005号址の内耳土器に煤等の付着がなく，調理具としての使用痕が全く認められないことも合わせて興味深いものがある。

さて，この005号址出土の内耳土器の年代であるが，既に述べたように内耳土器全般の編年については，近年いくつかの報文・論文を管見することができる。しかしながらそれらの編年は他の共伴遺物等の時期決定による編年であり，現段階ではあくまで試論の域を出たとは言い難いことを付言しておきたい。

先ず中村倉司氏によれば，内耳土器の変遷はⅠ期～Ⅴ期に分類され，このうち土鍋に関してはその初現をⅡ期以降としている。又焙烙との器型的な相違点として「体部と区別された口縁部が外傾すること」を上げ，その口縁部の外傾度を以って時期的な段階を認めている(註７)。この中村氏の



1.本宿・郷土遺跡ＧＤ２号不定形土坑出土
3.　　〃　　ＧＤ14号溝出土
2.本宿・郷土遺跡ＭＴ１号井戸出土
4.　　〃　　ＭＴ16号溝出土
5.南之保作遺跡７号土坑出土

図２　平底内耳土鍋実測図

編年によると，高沢古墳群005号址出土の内耳土器はⅢ期に属するものと考えられる。このⅢ期の内耳土鍋の特徴として，前段階(Ⅱ期)，すなわち内耳土鍋の出現期に見られるように，口縁部が内湾気味に外傾するが，その外傾が外面では不明瞭なものから，口縁部が若干長くなり外傾化が体部と明瞭に区別されること，体部が比較的急角度で立ち上がることなどを上げている。又底部については，Ⅱ・Ⅲ期が平底であるのに対し，Ⅳ期になると丸底を呈するとしている(註８)。これに対し大江正行氏は，内耳鍋型の出現段階では底部は丸底を呈し，その後平底化する段階を追うものとしている(註９)。

底部の変化については，内耳土鍋が中世から存在する鉄鍋の模倣ということを初現的根拠とするのであれば，該期の鉄鍋が丸底であるため，初期の土鍋が丸底であることも十分に考えられることであろう。事実，東京都青戸・葛西城跡では，底部に短かい３足を有する丸底の内耳土鍋が出土しており(註10)，明らかに鉄鍋を模倣して製作されたものと思われる。

底部の変化についての問題は，今後の資料の増加を俟つこととし，高沢古墳群005号址出土の内耳土器は，前述した中村・大江両氏によるとそれぞれⅢ期・内耳鍋型が平底化する段階に相当し，中村氏は15世紀，大江氏は15世紀後半～16世紀前・中半の年代を与えている。このことは，005号址の他の出土遺物による明確な時期決定が困難なため明言はできないものの，古銭２枚が渡来銭であり，土坑墓のいわゆる「六道銭」の一部と考えられるなら，これらの渡来銭が最も盛行していた時期，すなわち15～16世紀に比定され，両氏の年代とも比較的近い時期に相当すると考えられる。そこで以下では，005号址出土内耳土器の他遺跡での類似例について記してみたい。

Ⅳ

本章では，底部が平底で口縁部の外傾化が比較的明瞭になる時期の内耳土鍋を取り上げ，該期での口縁部の外傾化の細変遷について若干の私見を述べることにしたい。

第２図の１は，底部を欠損するが体下部の状態からみて平底を呈すると考えられる土鍋である。口縁部は比較的長く若干内湾しながらも大きく外反し口唇部に至る。体部も若干膨らみを有する。内耳は口唇部内面から連続して貼り付けられており，内耳を付さない口唇部内面はやや丸味を帯びて口縁部内面へと至る。２では口縁部の外反は更に明瞭となり，体部の膨らみもより大きくなる。１と同様底部を欠損するが平底を呈すると思われる。内耳はやはり口唇部から連続して貼り付けられている。３は２とほぼ同様の口縁部の外反を有する内耳土鍋で，口縁部の内湾はさほど見られない。又，口唇部内面は外面から平坦気味に口唇部を形成し，丸味を帯びず直角に近い角度で内面に至る。４では更に口縁部の外傾化が進み，体部と

の区別がより明確になる。又内耳を付さない口唇部内面は，内側の先端でやや突出気味である。5は1～4とは若干異なり器形もいくぶん小さめであり，口縁部は内湾しながら大きく外反し，膨らみを持つ体部と明確に区別される。又口唇部外面がやや突出し段を有しているのも特徴的である。内耳は口唇部から連続して貼り付けられ，平坦面を比較的長く保ちながら内面に向かって大きく張り出ている。

図2の1～5までの平底内耳土鍋について以上のことをまとめると次の通りである。

① 口縁部は比較的長く，体部から大きく外反する。

② 体部は若干の膨らみを有する。

①・②については，中村氏の言うⅢ期に通有の特徴であることは前述した通りである。

③ 口縁部の外傾化は，平底内耳土鍋になる前の段階に続いて，体部と明確な区別が認められる段階まで更に細変遷が認められる。

④ 口縁部で内耳を付さない口唇部は，口縁部の外傾化に伴なって丸味を帯びているものから，平坦で直角気味に内面へ至るもの，更に内側の先端部で若干突出して内面へ至るものへと変化が認められる。

③・④については全くの私見であるが，少なくとも口縁部の外傾化が平底内耳土鍋になる前の段階から徐々に認められてくるとすれば，平底内耳土鍋の段階でも口縁部の外傾が最も発達した図2の4まで1→4という変遷がたどれるのではないだろうか。更に図1の高沢古墳群資料に前記の①～④をあてはめてみると，005号址出土の内耳土鍋は図2の4と5の中間的様相を呈していると思われる。

この変化が時期差によるものかどうかは，今後更に検討を加えていきたいが，図2の1～5については，他の共伴遺物から1～4が15世紀後半～16世紀代の中様後半(註11)，5が近世初頭(註12)という年代を報文では与えており，図1と図2の1～4とを合わせて，15世紀後半～16世紀代についての大きな年代幅のなかでの分化ではないかと考えたい。

Ⅴ

以上高沢古墳群出土の内耳土器の資料紹介と，平底内耳土鍋の口縁部の外傾化に着目した私見についてまとめてみたが，今後は今回報告した私見の確証はもちろんのこと，今回全く取り扱わなかった内耳土鍋の出現期の問題，更に焙烙も含めた内耳土器全般についても検討していくことを今後の課題としたい。

（1班　東南部事務所）

註

1）中村倉司「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古・創刊号』

2）遠藤吉勝「中妻貝塚出土の内耳土器について」『取手と先史文化，中妻貝塚の研究・上』

3）大江正行他『清里・陣馬遺跡』
井上太他『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』
岩淵一夫他『赤塚遺跡』

4）奥田直栄『大谷口』松戸市文化財調査報告第2集
桑原・嶺井他『間野台・古屋敷』
矢戸・谷他『千葉市西屋敷遺跡』
大野・柿沼他『多古台遺跡群調査概要』
岡村眞文他『鹿島前遺跡』第3次発掘調査概報
岡村眞文他『鹿島前遺跡』第4次発掘調査概報
岡村眞文他『我孫子市埋蔵文化財報告書第3集』
岡川・鈴木他『千葉市東寺山戸張作遺跡』
栗本・上村「椎名崎遺跡」『千葉東南部ニュータウン・6』

管見に触れたのは以上であるが，当センター研究紀要・5によれば次の遺跡での出土例があげられる。

「栗山池の尻遺跡」，「平良文館」，「台遺跡A地点」，「南総中学遺跡」，「幸田貝塚」，「菅生第2遺跡」

5）前掲註4，『鹿島前遺跡』第3次発掘調査概報

6）前掲註2に同じ

7）前掲註1に同じ

8）前掲註1に同じ

9）前掲註3，『清里・陣馬遺跡』

10）宇田川洋他『青戸・葛西城址調査報告Ⅳ』

11）前掲註3，『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』

12）前掲註4，『我孫子市埋蔵文化財報告書第3集』「南久保作遺跡」